〔論文〕

ルーゴン=マッカール叢書のアルコール中毒（前編）

寺 田 光 徳

L'alcoolisme dans les Rougon-Macquart（1ère partie）

Mitsunori TERADA

L'alcoolisme héréditaire dans les Rougon-Macquart de Zola n'est pas valable quand on le traite selon la pathologie moderne, alors qu'il est encore bien exploitable dans le cadre narratologique. Dans *L'assommoir*, l'alcoolisme conduit un héros Coupeau à la mort par delirium tremens. Alors que l'alcoolisme devient un grand problème social dans la dernière moitié du XIXe siècle, Zola choisit de retracer de façon réaliste la chute sociale d'un ouvrier parisien. Quant à son épouse Gervaise, elle est aussi tombée dans l'alcoolisme et cet alcoolisme semble être d'autant plus causé par l'hérédité puisque son père et les enfants de Gervaise ont souffert de maladies d'origine alcoolique. C'est ainsi qu'en observant comment les descendants alcooliques de Macquart se débattent en vain pour leur existence et pourquoi les derniers descendants doivent mourir prématurément ou disparaître à l'étranger, nous démontrons que l'alcoolisme fonctionne comme principe de négation dans les Macquart.

キーワード：アルコール中毒、ゾラ、ルーゴン＝マッカール叢書、『居酒屋』

ゾラのルーゴン=マッカール叢書で描かれたアルコール中毒症とその遺伝に関しては『居酒屋』（1877）のテーマのひとつとして、また居酒屋の主人公のジェルヴェーズを含むマッカール家の人々を破滅させた要因としてたびたび言及されてきた。ただしアルコール中毒がしきりに話題にされても、不思議なことに本格的な研究対象としてこれまで真っ向から取り組まれることはなかった。おそらくその最大の原因は、叢書のアルコール中毒が荒唐無稽にも遺伝病のひとつと考えられていたことにあるだろう。科学的に成立しがたい理論に基づいて書かれたテーマなど考慮に値しないし、誤りであること

を承知で検討するのも最初から意気阻喪させる話だ、というのは理屈としてよくわかる。ただしゾラがルーゴン=マッカール叢書を書いた一九世紀後半は近代的な遺伝学の礎を築いたメンデルの法則すらいまだにその真価が認められていなかった。したがって専門家たちも優性遺伝と劣性遺伝という概念は持ち合わせず、疾病分類においても先天性疾患と遺伝疾患の区別もされていなかったので、アルコール中毒の遺伝以外にも、科学的観点からするといくらでも誤りをあげつらうことはできるし、しかもそれはゾラの作品に限ったことではない。ところでわれわれにとってわきまえておかなければならない肝心なことというのは、ゾラが自らの作品でアルコール中毒遺伝に関する理論を主張しようとしたのではなく、アルコール中毒遺伝を自らの作品を語るために利用したのだということである。ゾラのアルコール中毒遺伝を科学的理論として扱うなら無駄な話だが、そうではなくてここではあくまでも文学作品におけるナラトロジーのテーマとして検討することが目的である。

I　『ルーゴン家の繁栄』における飲酒癖

アントワーヌ・マッカールの生涯　ルーゴン=マッカール叢書第一巻の『ルーゴン家の繁栄』（以下『繁栄』と略記。1871年出版）には、飲んだくれのアントワーヌ・マッカールが登場する。彼はルーゴン=マッカール家の始祖アデライド・フークが愛人マッカールとの間にもうけた子供で、ユルシュールという同じ庶子の妹、そして異父兄で嫡出子のピエール・ルーゴンとともに、三人兄妹としてルーゴン家で育てられてきた。

アントワーヌ・マッカールの家庭環境は少々複雑なので説明しよう。母親のアデライド・フークは1786年にルーゴンと結婚し、1787年にピエールを生んだが、翌1788年には夫を亡くす。そこで隣に住んでいたマッカールを愛人にすると、1789年にはアントワーヌを、1791年には娘のユルシュールを生んだ。アデライド・フークは隣家のマッカールのもとへ通いはするものの、三人の子供は自分の元に引き取った。愛人のマッカールはというと、彼は放浪癖があって、人の噂では密輸入か密猟で収入を得、人前に姿を現したときには「恐ろしいほど酒をがぶ飲みしていた。居酒屋の奥でたった一人テーブルにつき、毎晩ふぬけのように自分のコップを凝視し、まわりの話に耳を傾け

ることも見まわすこともなく、忘我の境地に浸っていた。」（*Fortune*, p. 43［p. 51］）[1] そして1810年には密輸入の最中、国境で役人に撃ち殺された。

『繁栄』は南フランスの架空の都市プラサン（ゾラの生地エクス=アン=プロヴァンスがモデルとされている）が舞台で、ルイ・ナポレオンがクー・デタを起こした1851年12月当時の騒然とした状況を背景にしている。そこで話の中心になっているのは、ルーゴン=マッカール家の第二世代に属するピエールとアントワーヌの異父兄弟の確執、そして共和派の蜂起行動に参加して若い命を落とす、ユルシュールの遺児シルヴェールの行動である。

ピエール・ルーゴンはその頃すでに64歳で、生業の油商を引退していた。そこから40年前に時をさかのぼるが、殺害された愛人マッカールの家に引きこもる母親を尻目に、ピエールはフーク家の長男として家計の実権を握り、母親に家の地所を売らせ、そこから５万フランを自らの懐に入れる。そして1810年にフェリシテ・ピュエックと結婚し、彼女の家業をその資金でもって立て直した。こうして引退後も何とか年金暮らしをできるようになっていたのだが、当時のクー・デタ騒動に乗じて幸運をつかみ取ろうと、手ぐすね引いて時期を待っていたのである。

それに対してアントワーヌは庶子でも母親からユルシュールとともに認知されていたから、母親の財産を譲り受ける権利があったのだが、兵役で家を不在にしていたため、詐欺まがいの手でピエールに相続財産をまんまとせしめられてしまった。こうした恨みからアントワーヌは長兄のピエールに対してことあるごとに反目してきた。1851年12月、ルイ・ナポレオンのクー・デタの帰趨がどちらに転ぶかわからない状況の中でも、ボナパルティストとして暗躍しているピエールに対して、彼は共和派の跳ね上がりとして真っ向から敵対した。小説の山場に当たるプラサン市役所占拠の場面では、兄弟が敵味方に分かれ、アントワーヌはピエールに取り押さえられ、ボナパルティストを中心とするプラサンの保守反動派の捕虜にされてしまう。

アントワーヌが共和派に与するようになったのは、ピエールに対する反発に加えて、元来働くのが嫌いで、そのため常に貧乏暮らしを強いられ、金持ちを憎悪するようになったからである。1815年に兵役を終えてプラサンに帰ってきてからは、柳籠の職人として気分が向けば仕事をした。1826年にジョゼ

フィーヌ・ガヴォーダンと結婚すると、彼女の働きで飲み食いし、その後生まれた3人の子供ジャン（1831）、リザ（1827）、ジェルヴェーズ（1828）が働けるようになれば、ジャンやジェルヴェーズからもしょっちゅう給金を巻き上げる始末であった。

結局アントワーヌは、『繁栄』中では、兄ピエールを筆頭とするボナパルティストに掌握されたプラサンから国外に逃亡せざるをえず、その騒動のほとぼりが冷めてからプラサンの近郊テュレットに舞い戻る。ルーゴン=マッカール叢書［以下適宜「叢書」と略記する］の最終巻『パスカル博士』には、酒浸りの一生を送ってきたアントワーヌにふさわしい最期の場面が用意されている。たばこをすったまま居眠りしていた彼は、そのたばこの火が服に落ちたことにも気づかず眠り続けた。アルコール漬けで燃えやすくなっていた彼の体に服の火が燃え移り、最後に人が気づいたときには彼の姿はなく灰だけが残されていたのである。この物議を醸した自然発火（combustion spontanée）という異様な出来事が起こったのは1873年のことで、ナポレオンのクー・デタ騒ぎから20年たった、アントワーヌが84歳になってからのことであった。

アントワーヌ・マッカールの遺伝性飲酒癖　ここからは特にアルコール中毒に焦点を絞って、アントワーヌを見ていこう。アルコール中毒に関係して注目しておきたいアントワーヌに関する記述は、次の通りである。

> 16歳のとき、アントワーヌはすでにマッカールとアデライドの欠陥が融合した（fondus）ように現れている大きな悪童だった。しかしながらその放浪性、飲酒癖（ivrognerie）、すぐかっとなる性格からすると、マッカールの血筋の方が勝っていた。そしてそうした悪徳も父親においてはある種の多血質として明白な現れ方をしていたが、息子においてはアデライドから神経の影響を受けて偽善、欺瞞に満ちた陰険さを帯びていた。毅然とした意志の完全な欠如、またどんな汚らわしい褥（しとね）でも気楽に寝そべり、ぬくぬくと寝られさえすれば、受け入れてしまうような好色女のようなエゴイズムからすると、アントワーヌは母親の血筋であった。

（*Fortune*, p. 47［p. 56］）

ゾラがルーゴン=マッカール叢書を書くに際して、当時の遺伝学、とりわけプロスペール・リュカの遺伝学に依拠したことは周知の事実である。ゾラ研究の第一人者であるアンリ・ミットランがプレイアッド版のルーゴン=マッカール叢書の巻末に付した詳細な生成論研究の原資料には、そのリュカの著作（*Traité philosophique et physiologique de L'Hérédité Naturelle dans les états de santé et de maladie du système nerveux*, 2 tomes, J.B. Baillière, 1847 & 1850. 以下『自然的遺伝』と略記）のゾラ自身によるレジュメが含まれている。ゾラがリュカの『自然的遺伝』でどの点に特に着目したかを知る上ではまことに貴重な資料である。そのリュカの著作のなかで、上記の『繁栄』からの引用に見られる遺伝に関する「融合した（fondus）」は、その名詞形「融合（fusion）」とともに、遺伝の第二類型混成型（mélange）第一の形式に分類される専門用語である。ゾラ自身のことばで定義すると、「混成型は常に単純な凝集であり変形を伴わない。このような凝集がもっとも完全な形を呈するものが融合である。そこでは、両親から受け継いだものは平均的に融合し、珍しい中間的な現れ方をする。」[2] 引用では父親のマッカール、母親のマッカールの遺伝的性格が、このようなリュカの定義に沿うように記述されていると見ることができる。

ところでルーゴン=マッカール一族の遺伝については、ゾラ自身が簡便な形で表現したものが「ルーゴン=マッカール家の系統樹」として残されている。よく知られているのは叢書第八巻『愛の一ページ』の巻頭で1878年に掲載されたものと、その一部を修正したうえで第二〇巻『パスカル博士』とともに1893年に公刊されたものがある。しかしこの二つのほかに、公にされることはなかったが、ルーゴンマッカール叢書に取りかかる前の1869年に作成された系統樹、そしてそのヴァリアントして出版社ラクロワに手渡された異本の系統樹が存在している。[3]

先の『繁栄』にあったアントワーヌの遺伝に関わる記述について、すこし生成論的な関心から検討を加えてみると、いずれの系統樹でも、遺伝類型は「混成－融合形式」で、書き方に多少のずれはあるものの、「精神的には父親

似が優勢で、身体的にも父親と類似」（1878年、1893年）とされている。系統樹の記述に比べると、作中の記述の方は母親から伝えられた性格を丁寧に書き添えてあり、リュカの遺伝類型の定義に沿ったものになっている。

飲酒癖については、1878年の系統樹がなかではもっとも明確に「父親譲りの飲酒癖の遺伝」と表現しており、1893年にはそれまでの飲んだくれ（ivrogne）や飲酒癖（ivrognerie）に替わってアルコール中毒患者（alcoolique）ということばが使用されている。この書き換えの原因を『一九世紀ラルース大辞典』（1866-1879年発行）の《ivrognerie》およびその補遺第２版（1890年）の《alcoolisme》のそれぞれの記載内容の比較から推論してみると、アルコール中毒が大きな社会問題化することによって、どうやら中世から使い古されて、「飲んだくれ」や「飲酒癖」という一般的な意味も含んだ《ivrognerie-ivorogne》よりも、世間の動向に合わせて、専門的で明確な病理学的定義を与えられた、しかも人々の注意を引きやすい《alcoolisme-alcoolique》（『プチ・ロベール仏語辞典』によると前者は1858年、後者は1789年初出）を利用する方が、遺伝症例の記述というゾラの意図にかなっていたからだと考えられる。ここではそれより、ゾラの記述においても、彼が依拠したリュカにしても（ゾラのレジュメに「飲酒癖の遺伝」とはっきり記されている[4]）、そして一九世紀後半の学術ならびに一般常識を反映する『一九世紀ラルース大辞典』でも、アルコール中毒が一様に遺伝疾患として認められていることに注目しておきたい。『一九世紀ラルース大辞典』に言及したついでに述べておくと、アントワーヌ死亡の直接原因となった自然発火という現象についても、「飲酒癖」の項で触れられている。

ジェルヴェーズのアルコール中毒　慢性アルコール中毒症に陥ったアントワーヌ・マッカールが、『一九世紀ラルース大辞典』で振戦譫妄（*delirium tremens*）と並んで中毒症患者を死に至らしめる、まれに起こるという自然発火によって最期を遂げたとしても、ゾラに遺伝疾患と見なされたアルコール中毒はもちろんそこで終わるのではなく、その後もマッカール家の血を通じて生き続ける。

アントワーヌには三人の子供がいた。中でアルコール中毒に関係する人物

はジェルヴェーズである。『繁栄』の執筆前に構想された系統樹では、彼女については親の「酩酊中に身ごもられた」ために足が不自由（boiteuse）、それから後に「飲酒癖」のあるランティエと結婚するという記述だけで、彼女自身が直接遺伝性アルコール中毒症を患っているという記述はない。興味を引くのは夫婦の交接時の状況がそのとき胚胎した子供に影響を与えるという信仰にゾラが執心して、ジェルヴェーズの片足を引きずる先天的な障害をそのときの「再現」と見なし、系統樹中に最初から一貫してそのことを記していることである。これについてもまたゾラはリュカの『自然的遺伝』に依拠しているのではあるが[5]……。

『繁栄』の本文中では、ジェルヴェーズのその先天的障害と後に彼女自身が飲酒癖に陥っていく可能性を窺わせる一節が見られる。

> ……次女のジェルヴェーズは生まれつき足が曲がっていた。酔っ払っているとき、おそらくは夫婦が殴り合いをする例の恥ずべき夜に授かった子供だったので、彼女は右の腿が湾曲していて細く、奇妙な遺伝的再現だった。一時間にもおよぶ闘いと猛り狂った泥酔状態の中で母親が耐えなければならなかった暴行の痕であった。ジェルヴェーズはいつまでも身体が弱かったので、娘が本当に蒼白くひ弱そうなのを気にしていたフィーヌ［ジョゼフィーヌ、ジェルヴェーズの母親］は彼女にアニス酒の飲酒療法を施し、申し訳のようにあんたは力をつけなければだめだからだと言った。（*Fortune*, p. 124［pp. 150-151］）

幼いジェルヴェーズの体力強壮のために与えられたアニス酒というのは、とにかくアルコール度数の高いリキュールなので現代人からするととんでもない療法なのだが、その当時はまだ地域により昔の「アルコールは百薬の長」的な信仰が残っていたらしく、ジョゼフィーヌがひ弱な娘のために施した民間療法もそれほど突飛だとは言えない。だがジョゼフィーヌ自身が無類のアニス酒好きで、「彼女は憂さ晴らしにアニス酒を一リットル買い、［……］娘と一緒に毎晩ちびちび飲んでいた。」時には「このようにちびちびやっているうちに酔っ払ってしまい、［……］この母親と娘はばかのようになって、

薄ら笑いを浮かべ顔を見合わせているのだが、しまいにはろれつが回らなくなった。」（p.128［p.156］）ここまでくると母親が娘のジェルヴェーズにアニス酒を飲ませるのも、自分の飲酒癖のための口実にすぎないようで、そのためゾラも娘の体のひ弱さを「申し訳のように」引き合いに出してそのことを暗示する。アルコール中毒の観点からするなら、ジョゼフィーヌは罪作りな母親で、娘のジェルヴェーズに小さい頃からアニス酒を飲む習慣を付けてしまい、後の彼女の不幸な最期に向けて下地作りをしたと考えることができる。

先に触れたように、1869年の系統樹では、ジェルヴェーズのアルコール中毒に関する遺伝の記載はなかったのだが、彼女が主人公として活躍し、不幸な最期を遂げる叢書第七巻『居酒屋』（1877）のあとに書かれた、1878年の第二の系統樹では「1869年に貧困とアルコール中毒の発作で死去する」と記される。1893年のそれでは「アルコール中毒の発作」が「飲酒癖」に改められる。リュカによる遺伝類型について見ると、ジェルヴェーズのところには最終的に1893年に「父親の選択型（élection）」と書き込まれる。この選択型という遺伝類型は、先にアントワーヌところで触れた「混合型」とカテゴリーを異にし、もっぱら片方の親から遺伝を受け継ぐと定義される。[6] したがってゾラを含めた当時の人々が信じたアルコール中毒に関する憶説に沿ってアルコール中毒を遺伝疾患のひとつと見なすなら、ジェルヴェーズも当然アルコール中毒を遺伝的に受け継いでいることになる。ただし生成論的な観点からするとこうした結論はまだ尚早だろう。『繁栄』ではジェルヴェーズに関する叙述ははなはだ少なく、そのことからするとゾラが彼女のアルコール中毒に関して遺伝的疾患を云々するほど意識していたとは考えにくい。このことがゾラの意識に明確に上ってくるのは、彼女の波乱の生涯を綴った『居酒屋』以降のことであろう。

アルコール依存症　われわれはここまでアルコール中毒の定義自体を問うことなしに『繁栄』に描かれたアルコール中毒症をめぐって議論を進めてきたが、特にアルコール中毒症を遺伝疾患と見なしていることなどに現れているように、現代と叢書が書かれた一九世紀後半ではその定義にかなりずれがあることは明白である。有効な議論をするためには、議論する主体である我々

とその対象であるゾラの叢書の立場の相違をわきまえることが必要なので、アルコール中毒の定義を簡単に試みておこう。

ゾラが叢書を執筆した当時の慢性アルコール中毒に関する定義を、『一九世紀ラルース大辞典』の病的「飲酒癖」（ivrognerie）とその補遺「アルコール中毒」（alcoolisme）の項によってまとめてみると、過度のアルコール摂取が常態化したために、身体や精神の諸機能に障害が発生した状態を言う。身体に関する障害の代表的なものには脂肪肝など肝臓の変性（dégénérescence）があり、精神の障害では一時的に幻覚や妄想を引き起こす譫妄（délire）がある。慢性アルコール中毒を代表する極限的な症状は何と言っても「振戦譫妄」であり、それは四肢の震え（振戦）とネズミなどの小動物幻視、幻聴などの身体、精神の異常症状を中毒患者に引き起こす。

加藤伸勝らによると、[7] 1974年の世界保健機関（ＷＨＯ）の薬物依存委員会で「中毒」という症状は薬物が身体に急性の障害を生ずるものに限定されたので、中毒の名は急性アルコール中毒だけに残り、これまでここで述べてきたような慢性アルコール中毒は「アルコール依存症」とされた。そうしてアルコール依存に関わる医師の診断基準としては、飲酒を止められず、酒によって暴力をふるったり、仕事に支障を来すようになるような状態を「アルコール乱用」であり、それに離脱（禁断）症状が生じる場合が「アルコール依存症」として再定義されることになった。アルコール依存症の禁断症状にこれまでの振戦譫妄（アルコール離脱譫妄）やアルコール幻覚症が含まれるのは、かつての慢性アルコール中毒の場合と同じである。またアルコール依存症には先に指摘した肝臓を中心とする臓器障害がほとんどの場合随伴してくることは言うまでもないし、また精神障害としてはアルコール健忘障害（コルサコフ病）、さらにそれが進んでアルコール性痴呆が指摘されている。ところでアルコール中毒の遺伝については現代人の常識からしても言下に否定されることであり、アルコール依存症の中で遺伝に関する言及がないのはきわめて当然なことである。

こうした現代のアルコール依存症の診断基準に則って考えると、『繁栄』に登場してきたアントワーヌ・マッカールはまだ「アルコール乱用」の段階であり、後の『パスカル博士』の頃になると「アルコール依存症」という病

名を冠せられるであろう。またジェルヴェーズや彼女の母親のジョゼフィーヌのアニス酒好きは病的段階になる前の単なるアルコール嗜飲癖と言ってよい。

この先の議論では従来通りアルコール中毒という語を用いるが、しかしそれでもそこには現代医学で定義されたアルコール依存症やアルコール乱用を対照的に念頭に置いて、必要に応じてこれらの用語を利用したい。

Ⅱ　『居酒屋』の舞台背景

『居酒屋』の狙い　ゾラは叢書第一巻の『繁栄』で第二世代を中心にルーゴン=マッカール家の人々を登場させ、第二帝政下における一族の五世代にわたる今後の活躍の基礎を設定する。ゾラがアルコール中毒を遺伝疾患のひとつと考えていたとすれば、アルコール中毒の影響が出てくるのはマッカールの血を受け継ぐ人々の中ということになる。『繁栄』の中にマッカール家の長女リザが登場するが、彼女は母親の選択的遺伝ということで、遺伝に関して言えば父親の選択的遺伝と見なされるジェルヴェーズと対極的な位置にある。それを裏書きするように叢書第三巻『パリの胃袋』（1873）では、主人公として登場するリザは母親の堅実な性格を受け継いでそれを極端に展開し、自らの家庭を守護するためにはエゴイズムを徹底して押し通すことも厭わない。もちろん彼女にはアルコール中毒のかけらすらも見られない。結局、第七巻の『居酒屋』（1877）まで、リザをのぞけば叢書の中にマッカール家に属する人物が前面に出て奮闘する物語はないから、アルコール中毒のテーマを追いかけるとすれば、アルコール中毒症の素地を抱えたジェルヴェーズを主人公とする『居酒屋』が我々の次なる対象となる。

ところで叢書全体から見たとき、第七巻『居酒屋』はどのような位置づけをされていたのだろうか？　そもそもゾラが第二帝政下の社会を対象とする叢書を執筆しようと企てたときに、まず労働者の世界はその不可欠の構成要素として念頭にあった。

彼は1869年に、叢書出版を引き受ける予定であったラクロワに対して、『居酒屋』を想起させる作品について次のような計画を語っている。『居酒屋』の生成を語るときには必ず引用される作家自身の証言である。

ひとつは労働者の世界を舞台とする小説で、主人公はルイ・デュヴァル［後にクーポー］、彼はベルガス［後にマッカール］の娘ロール［後にジェルヴェーズ］の夫。現代の労働者一家の活写。市門（barrières）と酒場（cabarets）という環境からよからぬ影響を蒙り失墜していくパリの労働者に関する内面の捉えがたい葛藤のドラマ。［……］真実を語り、事実を率直に開示することによって、下層階級のために大気と光と教育を要求していくことは勇気ある仕事だろう。[8]

これとともによく利用されるもうひとつの証言も添えておこう。それは『居酒屋』の書かれる直前にあたる1875年のノートである。

民衆の環境を示し、その環境によって民衆の風俗を説明すること。というのも、パリにあっては、酒に酔い、家族バラバラで、殴り合いの喧嘩をするなど、ありとあらゆる辱めや惨めさを甘受しなければならないのは、過酷な労働、雑居状態、無頓着等々、労働者の生活条件そのものから来ているからだ。一言で言えば、民衆の汚さ、だらけた日常、粗野な言葉遣いでもって、彼らの生活を正確に描き出すことである。［……］[9]

こうして労働者の世界を描こうとすればアルコールは彼らと切り離しがたく結びついていた、それで『居酒屋』ではアルコール中毒を取り上げざるをえなかったというところが、ゾラを『居酒屋』でアルコール中毒の問題と真正面から取り組ませるにいたった事情である。『居酒屋』におけるゾラは労働者の生活環境とのかかわりの中でアルコール中毒症を取り上げているので、ここまで遺伝との関連で話題にしてきた我々とは扱い方を異にする。ジェルヴェーズの遺伝疾患としてのアルコール中毒症という問題も見られはするが、なんと言ってもこの作品のアルコール中毒はジェルヴェーズの夫ランチエが彼を取り巻く環境の圧力で最終的に振戦譫妄というアルコール中毒の典型的な症状によって最期を遂げるという側面の方が圧倒的である。

市門と酒場　ところで上掲した最初の引用に出てくる、ゾラが労働者の環境を代表するものとして挙げた「市門」と「酒場」には少し注釈が必要である。やがて『居酒屋』の物語が始まる1850年頃のパリは、「徴税請負人の壁」と呼ばれる1784-1791年に築かれた城壁によって周囲をぐるりと取り囲まれていた。南フランスのプラサンから出てきたジェルヴェーズが仕事を探しに行ったランチエの帰りを待ちわびるのは「ラ・シャペル大通りの、ポワソニエール市門の左手にある」（*Assommoir*, p.376［p. 8］）[10] ＜親切館＞の二階の一室で、この住居はその市壁の外側に立っていた。当時のパリはまだ12区からなる時代であり、ジェルヴェーズ一家が住むラ・シャペル大通り界隈はパリ郊外のラ・シャペル村に属す。パリが市域を拡大することは歴史的には古い城壁を破壊して、パリに編入された地域を新たに築いた城壁で再度取り囲むということを意味していたので、パリの城壁は一世紀のガロ=ロマンの時代から六回にわたって構築・解体されてきている。ちなみに、現在フォーブール・サン・トノレ街（Rue du Faubourg Saint-Honoré）などのように通りの名称の一部に残っている「フォーブール」は、もともと城壁外を意味したことばで、新たな城壁が築かれたことによっていつの間にか城壁内に組み込まれ、意味の上では矛盾を呈するようになった歴史的残滓でもある。また現在のラ・シャペル大通りを含む通称「郭外大通り」（boulevards extérieurs）も当時は文字通り城壁外にあったのである。そこでかつてのパリ外の住民はパリに入っていくために「市門」を通らなければならず、外部から商品をパリ市内に持ち込もうとするとそこで入市税を徴収されたのである。

南フランスからパリに出てきたジェルヴェーズがパリの北にある郭外のラ・シャペル村に身を落ち着けたことにもそれなりの理由がある。そこはジェルヴェーズ一家のような地方出身者が多かったからだ。この頃パリは産業革命の浸透で急速に発展し、地方からの労働力を多量に受け入れた。1851年から1856年までにパリとその近郊で26万人の新たな流入人口があった。1846年に早くも人口105万人を数えたパリだが、郊外を含めて、その四分の一に当たる住民がそこにまた加わるという急激な人口増に見舞われている。さらにパリ周辺には1852年から始まるオスマンのパリ大改造の影響で、家賃高騰のあおりをくらい市中からも貧しい市民が移住を余儀なくされた。こうした新た

な住民を迎え入れたラ・シャペル村では、先と同じ1851-1856年の期間中には78%の人口増加を示し、住民中で地方出身者の占める割合は65-70%に上ったという。[11] 仕事を求めてパリにやってきた地方出身者とパリ市内から追い出された人々からなるこうした郊外の住民たちは、当然のことながら大部分が貧しく、それゆえ狭苦しくて不衛生な住環境に押し込められ、劣悪な条件の中で生活することを強いられた。つまりゾラが一方の「市門」ということばで示そうとしているのは労働者たちの貧困と好ましからざる雑居状態なのである。

他方こうした労働者街にある「酒場」の理由はどこ見いだせるのかというと、入市税の最大の対象はワインやリキュールなどのアルコール類だったせいで、酒場の経営者たちが税を徴収される前の安価なアルコールを提供し、多くの顧客を呼び込むこもうとすれば、最良の立地は郭外大通りということになる。[12] パリの酒場の数は人口の膨張とともに数を増し、ゾラが叢書を書き始めた第二帝政末期の1869年の時点で――すでに1860年にパリは20区となり、ラ・シャペル村もパリの一部となっている――２万２千軒の酒場（小売店を含む）を数えるようになり、当然それはまた今述べた立地条件から郭外地区に集中した。さらに一九世紀末になるとそれは40万軒に増えて、３軒に１軒の家が酒場という極端な記述すら見いだせるくらいの数の多さであった。[13]

ただし酒場（cabaret）と言っても、酒を小売りし、食事時には簡単な料理も出す一般的な酒場から、もっぱら酒だけを提供し、当時は軽蔑的な意味合いも込めて居酒屋（taverne）と呼ばれたところ、またこれらに加えてレストランの役割も果たしたカフェまで入っている。ところでゾラの小説のタイトルとなっている「居酒屋」の原語《assommoir》は「鉛球がついた屠畜用の棍棒」を指しており、一九世紀の代表的な辞書である『一九世紀ラルース大辞典』や『リトレ大辞典』のどこにも居酒屋の意味はない。安酒がもたらす破壊的な作用から由来した酒場の名称で、この小説では普通名詞というより、コロンブ親父の酒場の店名なのである。

またＪ・ガイヤールの説明によると、当時の酒場は人々の生活に密着しており、庶民は家庭でワインを買い置きするよりも酒場に降りて飲みに行くし、労働時間が長いため、朝・昼の食事時に酒場がスープやワインを出すことか

ら、時間が十分とれない人々は酒場で食事を済ますことが多かったらしい。[14] ちなみにラ・シャペル村に一九世紀半ばにできた1407人を擁する北部鉄道会社の機械・車両工場では、拘束時間は朝６時より夜７時までの13時間で、その内訳は11時間の労働と２時間の休息。時間帯の配分は６－10時（労働３時間、休息１時間）、10－15時（労働４時間、休息１時間）、15－19時（労働４時間）となっていた。[15] 当時の労働者がこのような過酷な労働条件に耐えていたとすれば、彼らが朝や昼に時間をかけて食事をすることなどとうてい無理な話であろうし、『居酒屋』に描かれているように朝から酒場に赴いてアルコールを食事の代わりにしたり、なかには日に二回の休憩の度にアルコールを口にする者が出てくるような状況も窺い知ることができる。

『居酒屋』と市壁　『居酒屋』のなかでゾラは政治や社会に関する出来事を通して物語の時期がいつなのかをほのめかしているだけで、具体的な年号は記していない。しかし作品を21章に分かち———最終的にはそれが13章に変わるが、そこに各章の年代と内容を簡潔に記したプランが『居酒屋』のための資料に残されている。それとテクスト中に記された季節や月の記述とを照合して、物語は1850年５月にジェルヴェーズ一家がパリに出てきたところから始まり、彼女が悲惨な死を遂げる1869年の１月でもって終わる、とＨ・ミットランは推測している。[16]

この期間にパリ、特にこの『居酒屋』の舞台となる郭外大通りでは、光景を一変させるような出来事が起こっている。それが1860年の12区から20区へのパリ拡大に伴う「徴税請負人の壁」の撤去である。そこで1863年頃、ポワソニエール市門はなくなり、その後旧ポワソニエ通りの一部は拡幅されオルナノ大通り（現在はバルベス大通り）に吸収される（*Assommoir*、p. 737［p. 516］および『パリの歴史街路辞典』の《Chapelle》と《Poissonniers》の項参照）。[17]『居酒屋』に即して言えば、物語も終盤に近い十一章で市門付近の光景は一変することになる。

ところで主人公のジェルヴェーズの悲惨な生涯を予示するものとして、『居酒屋』第一章で彼女の目に映った市門付近の光景がよく引用される。

右手に目をやると、ロシュシュアール大通りの側である。そこには屠畜場がある。屠畜場の前には、血まみれの前掛けを付けた肉屋たちが立っている。ときおりそこから吹き寄せてくる冷たい風が悪臭を、屠られた獣の生臭いにおいを運んできている。左手に目をやると、長い並木道がある。この並木道は、ほとんど真正面、今建築中のラリボワジエール病院の白い建物のところで終わりとなっている。彼女は入市税関の壁に沿って端から端まで、ゆっくりと目で追ってゆく。夜には、入市税関の向こう側から、ときおり人の殺される悲鳴が聞こえてくることがある。短刀で腹を刺されたランチエの死体が見つかるのではないかしらとびくびくしながら、人気のない通りの角や、湿気と塵埃とで暗くて陰鬱な物陰を、目で彼女は探る。（*Assommoir*, p. 376［p. 9］）

ジェルヴェーズがパリで最初に居を構えたラ・シャペル大通りの＜親切館＞から、明け方まで帰らないランチエを待ちあぐねて、目の前を眺めやるシーンである。屠畜場と病院とそれらを結ぶ物騒な雰囲気を漂わせる市壁、ジェルヴェーズ目の前の光景はすべて禍々しく剣呑な様相に覆われている。

ジェルヴェーズの目の前にあった市壁というのは、高さ3.24－3.88メートル、幅0.97メートルある。その内側つまり旧パリ市側に幅11.66メートルの巡察路、外側に郭外大通り23.23メートルが取り付けられていた。この市壁を挟む二つの道路は市壁取り壊し後に一緒にされて、現在もほぼそのままの42メートルの大通りへと変わった。[18] それからジェルヴェーズの右手遠くに見える屠畜場は現在のアンヴェール公園とジャック・デクール高校の敷地にまたがって立っており、1867年新たにラ・ヴィレットに総合屠畜場ができるとまもなくとり壊されることになる（*Assommoir*、p.768［p. 560］および『街路辞典』、《abattoirs》の項、『モンマルトル』、pp. 92-93［p. 129］）。ジェルヴェーズの左手真正面で建築中だったラリボワジエール病院が出来上がったときには、「灰色の高い塀を張りめぐらした上に、規則正しく窓をくりぬいた陰気な翼館が扇形にひろがっていた。塀にある門は町じゅうをこわがらせていた。死者の門なのだ。裂け目ひとつない頑丈な樫の扉は、墓石のような厳粛と静寂をただよわせていた。」（*Assommoir*、p.768［p. 560］）

これらのことから考えてジェルヴェーズの目に映じた光景とは、彼女の視線を遮断して延びている、陰で殺人でも行われているのではないかと想像させるような高さが３－４メートルもある陰気な市壁、その市壁越しに見える建築中の高い病院と屠畜場、わずかにパリ市内を見透かせる市壁をうがつポワソニエール市門ということになる。

だがこのようにジェルヴェーズの目に映った情景を必要以上に強調してはならない。なにせジェルヴェーズは南フランスから出てきたばかりで、しかも彼女と一緒だったランチエからは見も知らぬパリの場末のアパルトマンに子供二人とともに置き去りにされ、心中不安で一杯で、頼みの綱である情夫の帰りを今か今かと待ちあぐねて、遂に明け方にまでなってしまったときの情景描写なのだから。しかも屠畜場とともに挙げられたロシュシュアール大通りといえば、現在では世界中に知られたパリ、モンマルトル歓楽街の一角にあってもっとも殷賑を極めた町のひとつになっているから、ジェルヴェーズの抱いた最初の印象は大いに割り引いて考えなければならない。

『居酒屋』の地理学　ところで郭外大通りは、それを眺めるジェルヴェーズに一方でこのような殺風景な眺望をもたらすにしても、その反対側の彼女が当分の間逗留するアパルトマンの並び、つまり中に郭外大通りを挟んで市壁と反対側には、歓楽の町モンマルトルのイメージを彷彿させる酒場や歓楽施設が当時から立ち並び、『居酒屋』のテクストにもそれが相当数記されているのである。大きなダンスホールの大部分はいまでも史実として確認されるほどゾラのリアリズムは徹底されているので、『居酒屋』研究外への思わぬ波及効果も考えられることから、以下煩瑣になるが作中の登場人物たちが訪れた場所を詳しく見ておきたい［一部はp. 55の地図も参照されたい］。

「コロンブ親父の＜居酒屋＞はポワソニエ通りとロシュシュアール大通りの角にある。」（*Assommoir*, p. 403［p. 51］）ところで、そのポワソニエ通りの南端に当たる郭外大通りにいたる部分は1863年から現在のバルベス大通り（当時はオルナノ大通り）に拡幅・再編されたので（p. 737［p. 556］）、現在の名称で言うとバルベス大通りとロシュシュアール通りの交差したところにその酒場は位置していることになる。ポワソニエ通り（現バルベス大通り）

の延長線上で南に延びているのがそれと相称をなすフォーブール・ポワソニエール通りである。だから、先にジェルヴェーズの＜親切館＞のところで言及した「ポワソニエール市門」は、郭外大通りを挟んでコロンブ親父の＜居酒屋＞の向かいに位置する。ということは、この＜居酒屋＞は位置からして当時の典型的な「市門の酒場」であり、そうした立地に恵まれて物語の中でも昼日中の12時前から満員で、仕事の合間に立ち寄ったジェルヴェーズとクーポーのカップルが外へ出ていくにも難儀するくらい盛況だったのもうなずける話である（p. 412[p. 65]）。

繰り返すと、コロンブ親父の＜居酒屋＞は、東西方向では、東へ走るラ・シャペル大通り西へと向かうロシュシュアール大通り、南北方向では、北へ上るポワソニエ通り、市門を介して南へ下るポワソニエール通りの、四本の道路がなす交差点の北西角に立っている。つまり、この小説『居酒屋』の登場人物の行動範囲から考えて文字通り中心の位置を占めている。そこでこのコロンブの＜居酒屋＞を中心にして、登場人物たちの活動の場、とりわけ歓楽スポットを主にした『居酒屋』の舞台を地理的に限定しておこう。なお以下は『居酒屋』のテクストとプレイヤッド版へのH・ミットランの注記に依拠し、それらをJ・イレレの『街路辞典』およびL・シュヴァリエの『モンマルトル』によって補足してまとめたものである。

まず東の方では、ダンスホール＜グラン=バルコン＞がラ・シャペル大通りの入り口のところ、つまりポワソニエ通りを挟んでコロンブ親父の＜居酒屋＞の向かいに立っている（p. 375[p. 7]）。当時のラ・シャペル大通りは現在の地下鉄の駅名で言うと、バルベス=ロシュシュアール駅からラ・シャペル駅までの大通りの呼び名である。ラ・シャペル駅のところからは現在北にマルクス・ドルモワ通りが延びているが、その呼称も改名の結果であり、『居酒屋』の時代はラ・シャペル通りであった。そしてこの旧ラ・シャペル通りが『居酒屋』の世界の東限を構成している。ラ・シャペル大通り上をその東限まで行くあいだに、ジェルヴェーズがランチエとの結婚の披露宴を催す酒屋＜銀風車＞がある（p. 432[p. 94]）。さらに東限のところの市門をラ・シャペル通りに沿って北に向いたところには、ジェルヴェーズよりも行動範囲の広いクーポーが行っていた封印付きの葡萄酒を出す＜カピュサン＞（p.

503［p. 191］)、その向かいに＜カドラン・ブルー＞（p. 619［p. 349］）がある。それから「サン=ドニ市門のところのところにある飲み屋」ということだから、それらの付近には＜咳する坊や＞（p. 412［p. 65］）もクーポーがアルコールに溺れてからよく出かける店のようである。

また同じくクーポーが足を運んだ＜ヴァンダンジュ・ド・ブルゴーニュ＞（p. 619［p. 349］）はラ・シャペル大通りから一本北の通り、ラ・シャペル通りから西に向かって延び、先でラ・グット・ドール通りにつながるジェサン通りにある。十一章になってクーポーとジェルヴェーズの娘ナナがモンマルトルのダンスホールを総なめするようになるが、そのなかで一番東にあるのがラ・シャペル通りの＜グラン・サロン・ド・ラ・フォリー＞である（p. 738［p. 517］)。

今度はコロンブの＜居酒屋＞から西に向かうとモンマルトルの歓楽の中心街ロシュシュアール大通りとなる。作中に掲げられているものだけに絞ると、先程の屠畜場の向かいで、スタンケルク通り（旧ヴィルジニー通り）の角にはダンスホール、＜エリゼ・モンマルトル＞が1807年から立っていたし、それから先のマルチール通りの角に至る前の120番地にあった＜ブール・ノワール＞は1822年の創設で、その後『ナナ』やゴンクール兄弟の『ジェルミニー・ラセルトゥー』にも登場してすっかり有名になった（p. 742［p. 524］)。これらふたつのダンスホールはともに一九世紀前半からの長い歴史を持ち、モンマルトルの歓楽を代表する娯楽施設としてモンマルトル界隈の住民だけでなく郭内のパリジャンからもその名をよく知られていたことが、L・シュヴァリエの『モンマルトル』からは十分に窺うことができる。まだこのほかに『居酒屋』のテクスト中にはどうやらマルチール通りの角にあったらしいカフェ・コンセールに対する言及がある（pp. 628-630［pp. 362-364］)。ちなみにロシュシュアール大通りの84番地で、奇想に富んだ芝居で芸術家たちを引きつけた＜シャ・ノワール＞は、＜エリゼ・モンマルトル＞のすぐ隣に1881年末に誕生しているのだが、もちろん『居酒屋』の時代の後の話である。

この時期モンマルトルの歓楽の中心はロシュシュアール大通りにあったので、それに続くクリシー大通りはまだ世紀末以降のにぎわいを見せてはいなかったようだ。だがジェルヴェーズの夫クーポーと彼女の情夫だったランチ

エは連れだってクリシーよりまだ先のバティニョールまで出かけていった。だからこれが西の限界である。クリシー大通りでは＜ヴィル・ド・バール=ル=デュック＞（p. 619[p. 349]）がランプルール通り（現ルピック通り）の角にある。L・シュヴァリエによれば、ロシュシュアールからクリシーを結ぶ大通りのダンスホールでひときわ異彩を放っていたのは、先に挙げたロシュシュアールの＜エリゼ・モンマルトル＞、＜ブール・ノワール＞、そしてクリシーのブランシュ広場にあった＜レーヌ・ブランシュ＞（p. 742[p. 524]）である。なおこの＜レーヌ・ブランシュ＞はやがて不興をかこって閉鎖され、その跡地に1889年に誕生したのが後にモンマルトルの歓楽を代表するまでになる、世界に名を知られた高名なダンスホール＜ムーラン・ルージュ＞である。

郭外大通りから北へと上る通りで、『居酒屋』の世界の東限にあたるラ・シャペル通りはすでに見たが、次にポワソニエ通り（南端は後にオルナノ大通り、現在のバルベス大通りに併合される）はジェルヴェーズ一家の日常の生活圏に入る通りで、クーポーがよく立ち寄る酒場が目白押しに並ぶ。コロンブの＜居酒屋＞の他にも、フランソワの経営する、賭博もやっていた酒屋（p. 516[p. 209]）、おいしいプラム酒の飲める＜小さな麝香猫＞（p. 570[p. 280]）、オルレアン産のワインがおいてあるバケおばさんの店（p. 570[p. 280]）、御者たちのたまり場になっていた＜パピヨン＞（p. 570[p. 280]）、オーヴェルニュ産のワインが飲めるルイばあさんの店（p. 625[p. 357]）などがある。またナナがいくらか上品な服装をして踊るダンスホール＜グラン・チュルク＞（p. 742[p. 524]）は現在のバルベス大通り10番地にあり、創設は1806年と古く付近の人々の社交場としてにぎわっていた。

ポワソニエ通りから一本西へ移動するとクリニャンクール通りとなり、そこには1845年に開業したダンスホール＜シャトー・ルージュ＞（p. 742[p. 524]）がある。場所は現在の地下鉄シャトー・ルージュ駅の西側に当たるので、かなり郭外大通りから中に入ったところである。またこの通りにはクーポーとランチエが連れ立って「バター焼きの腎臓に舌鼓を打った」レストラン＜金獅子＞と＜二本のマロニエ＞がある（p. 619[p. 349]）。

これよりさらに西へ向かうと、郭外大通りからモンマルトルの丘へと登っ

ていく一帯は歓楽街の後背地で、そこにある通りにもやはり歓楽施設があふれている。カドラン袋小路のダンスホール＜バル・ロベール＞（p. 742[p. 524]）、それから当時のパリ市内からマルチール市門を経てモンマルトルの丘の西側へと延びるマルチール通りには、「みんなが満ち足りた気持ちで自由を楽しみ、だれにも邪魔されずに、奥で好きなように抱き合うことのできる」＜レルミタージュ＞（p. 742[p. 524]）というダンスホールがあった。ランチエとクーポーに「仔牛の頭」を堪能させたレストラン＜リラ＞はやはりマルチール通りにあるが、L・シュヴァリはこのマルチール通りに「マルチール通りの大衆食堂」という一節を割いて、歓楽の前味、後味としてあったこの通りにひしめくレストランの特徴を強調している（『モンマルトル』p. 108[p. 154]）。

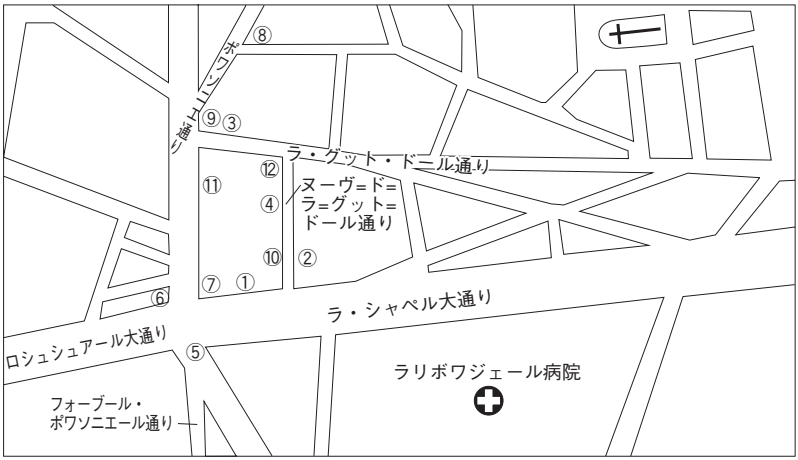
歓楽街の西の果てに当たるブランシュ広場から北に走るルピック通り（南半分は旧称ランプルール通り）の奥まった77番地には、＜ムーラン・ド・ラ・ギャレット＞（p. 619[p. 349]）がもうすでにあり、料理やダンスでランチエやクーポーを楽しませた。

まとめると、歓楽を中心に見たとき東はラ・シャペル通り、西はブランシュ広場から発するランプルール通り、南は市壁があるため郭外大通り――ただしナナが大きくなって働き始めると、南限は郭外大通りからずっと南のグラン・ブルヴァールを越えたケール通り（現在の二区と九区の境界を構成するボンヌ・ヌヴェル大通りより南で、セバストポール大通りから西へ延びる通り）まで達する――、北はモンマルトルの丘を挟んでポワソニエ通りの＜シャトー・ルージュ＞とルピック通りの＜ムーラン・ド・ラ・ギャレット＞を結ぶ線あたりとなる。しかし北の方向についてはジェルヴェーズに思いを寄せるグージェの働く工場がマルカデ通りにあり、そこをジェルヴェーズが何度なく訪れているので生活の北限はまだ延びる。結局、『居酒屋』のテクストには、1841－1845年に建てられたティエールの壁（Fortification de Thiers）[現在のパリ市の境界にほぼ匹敵する]、つまり「砦」（Fortifications）という言葉が三度ほど出てくるので、北限は現在のネイ大通りと見なすことができる。[19]

次に上述してきた歓楽街に囲まれている、ジェルヴェーズ一家の生活圏で

あるラ・グット・ドール通りとその周辺を見ておこう。

ジェルヴェーズは最初三階建てのぼろアパルトマン①＜親切館＞に滞在する、そこの上階には未来の夫クーポーが住んでいた。そのクーポーと結婚後はポワソニエ通りの東隣に当たるヌーヴ=ド=ラ=グット=ドール通り（現在のデ・ジスレット通り）にある②二階建ての小さなアパルトマンに新居を構える。ここで隣家となるのがグージェ母子の一家であった。それからクーポーの転落事故にもめげず一念発起して洗濯屋を開く。彼女が洗濯屋の開業にこぎ着けられたのは、彼女に一途な思いを寄せるまじめな隣人のグージェが、クーポーの事故で不足した分を援助してくれたおかげであった。その洗濯屋はラ・グット・ドール通りにある七階建ての大きなアパルトマンの一階に開店する③。七階にはクーポーの姉アンナがロリユーと結婚して住んでいた。ジェルヴェーズは後に洗濯屋をたたんで住居を変わらざるをえなくなるが、死ぬまでこのアパルトマンを動くことはない。コロンブの＜居酒屋＞などとともに彼女の住居の周辺を図示する。



［Colette Becker, *Emile Zola. L'Assommoir,* p.55の図による］

①＜親切館＞　②二番目のアパルトマン　③洗濯屋兼住居　④洗濯場（一章）
⑤ポワソニエール市門　⑥＜居酒屋＞　⑦ダンスホール＜グラン・バルコン＞　⑧シャルルの肉屋
⑨フランソワの酒場　⑩フォーコニエ夫人の洗濯屋　⑪クードルー夫人のパン屋
⑫ル・オングルの食料品店

Ⅲ　クーポーのアルコール中毒

マニャンの『アルコール中毒』　叢書第七巻『居酒屋』（1877）は第一巻の『繁栄』で登場したジェルヴェーズを一方の主人公に戴く。しかしそこには、アルコール中毒に関してジェルヴェーズの影をなからしめる人物として、ジェルヴェーズの夫クーポーが他方に登場している。クーポーは、最初は仕事熱心なブリキ職人だったのだが、いったん屋根から落ちるという大事故に遭ってから、徐々にアルコールに身を持ち崩していき、結局サン=タンヌ病院における振戦譫妄故の狂死という悲惨な最期を遂げ、それに呼応するようにして零落した妻ジェルヴェーズも程なく生涯を閉じる。それ故『居酒屋』は、パリの場末の一労働者がこれまで縷々述べてきた環境に影響され、最終的にはアルコール中毒に陥って悲劇的な最後にいたるという、アルコール中毒患者に関する一種の症例として読むことができる。

ところでゾラが『繁栄』を執筆している頃には、彼のアルコール中毒に関する知識は当時の一般常識の範囲を超えるものではなかった。しかしアルコール中毒を前面に押し出した作品を書くに当たって、彼はさすがにそれでは不備だと感じたのであろう、専門医ヴァランタン・マニャン（1835-1916）の名著『アルコール中毒』（1874）[20] を重要な参考文献として取り上げ、そこから吸収したアルコール中毒に関する専門的知識を作中に反映させた。

マニャンの著作は全五章からなるが、そのうち『居酒屋』のクライマックスに当たるクーポーの振戦譫妄のシーンについては、第三章の「発熱性振戦譫妄」で詳述された諸症状が主に利用されたと推測される。第四章「慢性アルコール中毒」には、知的、身体的機能に関する障害、痴呆、全身麻痺、半身不随や知覚脱失にいたる症状が、多くの症例とともに説き明かされ、これも参考になる。さらに作中の描写に効果的に科学テクストを利用しようとして、ゾラがどのような書き換えを行っているかを分類したN・スコールは、第二章「人のアルコール中毒性譫妄」中の症例記述から採った例を挙げている。[21] このようにゾラは『居酒屋』を書き進めるに当たって、当時のアルコール中毒に関する先端的な医学的知識、特に症候学的な記述を有益に利用したことは疑う余地がない。ただしその医学的知識も小説の説話法との間で折り合いがつく限りにおいてであることは言うまでもなく、『居酒屋』がマニャ

ンの説くところにしたがって演繹的に作品化したものと見なすことはできない。むしろ『居酒屋』は当時の労働者の世界をつぶさに観察し、そこから労働者がいかにしてアルコール中毒に陥っていくのかを実証的に跡づけたと見るならば、医学者の側からするならそこにアルコール中毒患者の生々しい、社会性に満ちた症例を見いだしうることになるだろう。結局医学者にとってゾラの『居酒屋』は、医学的な論証をさらに豊かにするために役立つひとつの症例として、さらには帰納的な観点から病因論を中心に医学理論に修正を迫る著作となりうる可能性すら持っているのである。

我々はこれから『居酒屋』をアルコール中毒のひとつの症例のように読み込んでいくのだが、それはもちろんマニャンの説くアルコール中毒の理論を外挿法的に適用しようというのではない。それよりも『居酒屋』の説話の論理にしたがって、クーポーに見るアルコール中毒の症例を読み解いていくことになろう。

アルコール中毒の観点からすればクーポーが我々の考察の主要な対象となるのだが、彼の妻となるジェルヴェーズについても『繁栄』の時代から遺伝によるアルコール中毒症の傾向が見られた。すると遺伝の症例としてのアルコール中毒にも目配りをしようとするなら、ゾラは当然ジェルヴェーズもクーポーと並んで不可欠の考察対象としなければならないはずだ。そこで『居酒屋』執筆の頃に、ゾラがアルコール中毒と遺伝の関係をどう考えていたか、また彼の依拠したマニャンがどのような立場をとっていたか簡単にまとめておこう。

すでに述べたように、『繁栄』を書く際に非公開の系統樹中で示したジェルヴェーズにはアルコール中毒という記述はなく、『居酒屋』後の1878年の系統樹で初めて「アルコール中毒の発作」、1893年になると「飲酒癖」という言葉が記載された。しかしながら、他方でジェルヴェーズが父親アントワーヌ・マッカールの選択的遺伝類型として分類されていること、それからゾラ自身がリュカの『自然的遺伝』のレジュメ中に「飲酒癖傾向の遺伝」[4] という表現を残していることを考え合わせると、彼にとっては父親のアルコール中毒が何らかの形で娘のジェルヴェーズに遺伝的な影響を与えることは当初から想定されていたと推論される。

他方マニャンの著作を紐解いてみると、たとえば、慢性アルコール中毒患者の中でも身体的障害が消失してからも妄想（idées délirantes）を長い間引きずる患者について「［……］神経系を患う患者にあっては、ふつう病毒物質のいっそう強力かつ継続的な作用を解き明かすのは遺伝性の病歴である。しかもこれらの患者たちはたとえ症状が改善されて精神病院から出られたにしても、すぐにも暴飲をしてしまうので、彼らにとっては中毒症の再発はおきまりのことだとも言える」としたり、「今日ではすべての著者が渇酒症（dipsomanie）とアルコール中毒を区別している。前者はたいてい遺伝に起源を見いだす、本能的な偏執症の特殊形式である。それに対してアルコール中毒症はだれにも同じように現れてくる単純な中毒症で、付言すると動物にも人間にも見られる。」と述べたりして、アルコールが神経を介する遺伝と結びついて子孫における抜きがたいアルコール嗜好癖を根付かせると見なしている。[22]

またその頃の知識を代表する『一九世紀ラルース大辞典』の「遺伝」の項には、M・デスキュレという医者の所説が紹介されていて、「特に両親が二人とも飲酒癖に冒されていた場合には、その飲酒癖は情念の中でも遺伝によってもっとも頻繁に伝えられることが観察されるものである」と説かれている。

こうしたアルコール中毒と遺伝の関係は、アルコール中毒がフランス社会全体を巻き込むほどの重大問題と化した二〇世紀初めの頃になると、効果的に社会に危険を警告しようとしたこともあってか、ひどく誇張した主張をされるようになる。「以前飲んだら将来も飲む（酒の味を知ったらやめられぬ）」（Qui a bu boira）ということわざを文字通り地でいくように、たとえば「遺伝アルコール中毒症者」（hérédo-alcoolique）という造語を使うR・ロムは、アルコール中毒症者の子孫は親に輪をかけたアルコール中毒症者になると主張するまでになる。[23] だが『居酒屋』のゾラはアルコール中毒と遺伝の関係をアルコール中毒であれば必ず子孫に遺伝するかのような宿命的なものと見なすのでなく、むしろそれよりは穏当にマニャンの主張に依拠してアルコール中毒は遺伝する可能性があるというように考えていたことを念頭に置いておかねばならない。

発端：ジェルヴェーズとクーポーのアルコール嗜好　物語が動き出してしばらくたった頃のことである。ジェルヴェーズは仕事を探しに行ったきり帰ってこないランチエにすっかり愛想を尽かしていた。そのうちに同じ＜親切館＞に住んでいたブリキ職人のクーポーと親しくなる。まもなくジェルヴェーズはそのクーポーから結婚をしようと口説かれるのだが、それはコロンブ親父の＜居酒屋＞での出来事だった。

場所が酒場なのでプラムをかじりながら二人の話題がアルコールにおよぶと、ジェルヴェーズはかつてアニス酒好きだった、「ところがある日それで死ぬ目にあって、以来大嫌いになった。酒など（liqueurs）いまでは見るのもいやだ」（*Assommoir*, p. 410［p. 61］）と言う。これに相手も同調する。

> クーポーもみんながブランデー（eau-de-vie）をなみなみとついだグラスを何杯も流し込めるわけがわからなかった。時々、プラム酒（prune）一杯くらいなら悪くない。だが安物ブランデー（vitriol）、アブサン（absinthe）、そのほかいかがわしい安酒（cochonneries）、こいつはごめんだ！そんなものいるもんか。仲間の連中からばかにされても平気さ。飲み助たちが安酒場へはいるときでも自分は戸口に残っている。父親はやはり同じブリキ屋だったが、ある日、大酒を飲みコクナール街の二五番地で樋から落ち、敷石で頭をぐしゃりと砕いた。この思い出が家族みんなを賢明にしたんだ。コクナール街を通って父親の落ちた場所を見ると、飲み屋で振舞酒を飲むくらいならどぶ水を飲んだ方がましだといつも思うんだ。（p. 410［pp. 61-62］）

二人はこのように酒嫌いを強調するのだが、手頃な場所がなかったとはいえわざわざコロンブの酒場に入ってこのように語り合っているところを見ると、彼らの主張もまったく額面通りに取ることはできない。こうしたことを裏書きするように、直前にはこの＜居酒屋＞の仲間たちからクーポーは「カシスの舎弟」と呼びかけられる。後でジェルヴェーズにこの渾名の由来を訊ねられると、彼は「無理に飲み屋に連れ込まれたときには、おれはたいていカシスを飲むんでね」（p. 413［p. 66］）と答えている。「カシス」というのは

くろすぐりの実を原料とするフランスの代表的なリキュールであり、一九世紀半ばからは「クレーム・ド・カシス」という名でよく知られるようになった。甘みの濃いリキュールなので食前酒キールなどに利用されてカクテルとして出されることが多いが、アルコール度数はおよそ20度で、アブサンなどとは比べものにならないにしても（アブサンは普通70度位ある）、それでもストレートで飲むとなると度数は結構高い――ただしあまりにも甘すぎてストレートで飲む者などいるかという批判も出てくるかもしれないが…。クーポーの「カシスの舎弟」という渾名はそれだけでもすくなくとも彼がまったくの酒嫌いではなく、付き合い酒なら飲んでいたことを指し示すだろう。また引用中では親の死因がアルコールだと語られていたが、1893年の系統樹に載せられたジェルヴェーズのところに「アルコール中毒の家系のクーポー」とはっきり酒飲みの家系出だったことが書き込まれている。クーポーがすぐにもアルコールに溺れ込むような環境と素地を持っていることは明白だ。

この＜居酒屋＞には名物である赤銅の大きなアルコール蒸留器があった。それは、この蒸留装置の「首の長い蒸留器や地下に潜っている螺旋管が、いかにも悪魔の台所といった感じで、酔っぱらった労働者たちがこの前にやってきては、ぼんやり夢想する」（p. 404[p. 52]）という代物だった。ジェルヴェーズとクーポーのカップルも、そうした酔っぱらいと同じように、それに興味を惹かれて店を出る前にしげしげと眺める。

> 蒸留器には奇妙な格好のガラス容器と、ぐるぐると数限りなく巻いた管がくっついていて、陰気くさい外見を呈している。煙ひとつ出ていなかった。内部の空気の動く音と地下のうなりがかすかに聞こえてきていた。陰鬱で強力で寡黙な労働者が真昼間にやっている深夜作業という感じであった。[……] 銅器の鈍い光沢の蒸留器は炎ひとつあげず、陽気な影ひとつ見せず、ただひっそりと働きつづけてアルコールの汗を緩慢で執拗な泉のように吹き出していた。そのアルコールの汗は、そのうちこの部屋を浸して、郭外大通りの上にあふれ出し、パリという巨大な穴じゅうをいっぱいに満たしてゆくことになるのだ。そこでジェルヴェーズは戦慄を覚えてあとずさりした。だがそれでも、微笑をつくりながら

つぶやいた。

「ばかね、私この機械のせいで寒気がするの…お酒はぞっとするわ。」（pp. 411-412［pp. 63-64］）

ジェルヴェーズにとってみれば恐いもの見たさのなせる技ということになるのだが、彼女の行く末を承知の上で蒸留器をこのようにゾラが描写していると想定する限りでは、そこには単なる比喩のレベルを超えて蒸留器には必要以上に生気が吹き込まれていることが見て取れるし、二人がやがては否応なしにそれに呑み込まれるという運命にあることが暗示されていると考えることができる。

ジェルヴェーズとクーポーのカップルに対して、その場に居合わせた＜居酒屋＞の常連である＜長靴＞はこの蒸留器を見て恐れもせず言う、「畜生め！かわいいやつだぜ、こいつは！この銅のでかいおなかにゃ、喉をさっぱりさせるものが一週間分つまってやがるんだ。おい、だれかおれの歯にこの螺旋管の端を溶接してくれないか。そうすりゃ、できたての熱いブランデー（vitriol）がおれの五臓六腑にしみわたり、踵までいつまでも、いつまでも小川みたいに流れおちて、へ、すてきな気分だろうぜ。どんなことがあったって、おれはすわりこんでもう動かねえ」（p. 411［p. 63］）と。

アルコールを表向き否定してみせるカップルではあった。だが、そもそも酒場という二人の会合の場からしてそうだが、さらにそこでの二人の行動には、ことばと矛盾する点が種々露呈されている。隙あらば呑み込もうと構えている不吉な動物的イメージを漂わせている蒸留器を前にして、彼らは幸せそうな逢瀬に目がくらんで隙だらけの姿をさらしていると言える。やがて二人がこの怪物に隙をつけ込まれるのは目に見えているだろう。

転落事故とアルコールのエスカレート　ジェルヴェーズとクーポーは結婚し、それから翌年ヌーヴ=ド=ラ=グット=ドール通りの新居に引っ越しする。まもなく、1851年４月末にはアンナ（愛称ナナ）も生まれる。ところがジェルヴェーズ一家を突然の悲劇が襲う。ナナが満３歳になったときの1854年５月、ジェルヴェーズがナナをつれてクーポーの仕事場にまわると、ナナに気

をとられたクーポーが屋根から転落してしまったのである。しかし妻のジェルヴェーズは不吉なラリボワジエール病院に入院させないで、自分の力で何とか夫の命を救おうとする。病院に入ったら最後命は取り戻せない、というのがこの頃の病院に対する一般人の評価であった。幸い一命を取り留めたクーポーは、ジェルヴェーズの献身的な看病のおかげで、二カ月もすると起きあがれるようになった。それでも、その後の二カ月は歩き回るには松葉杖の助けが必要だった。

「うちの親父は酔っ払った日に首を折った。自業自得とは言えやしねえが、まあつじつまは合ってらあ…。ところがおれはしらふで、ばかみたいにおとなしくて、一滴の酒も体に入っちゃいなかったんだ。それなのに、ナナに笑顔を見せようと振り向いたとたん、落っこちてやがる！…これじゃあひどいと思わないかい？もし神様がおいでだとすりゃ、おかしなことをなさるもんだ。どう考えても合点がゆかねえ」と言って自分の不運を呪ってみせ、「足が治るにつれて、彼は何となく仕事を憎むようになってきた。」（*Assommoir*, p. 488［p. 171］）そして回復に要する期間はずるずると延びていき、半年たっても仕事場になかなか戻ろうとはしなかった。もちろんクーポーがこうした無為の日々を送れるのも、働き者のジェルヴェーズが一心に家計を支えていたからではある。ただし時に彼は仕事場へ顔だけ出し、帰りに仲間と酒場で憂さ晴らしをすることもあった。そのときの言いぐさはこうである。

> これくらいならべつに悪いことじゃないぜ。［……］ワインの一杯くらいで男一匹、殺されるわけでもあるまいしさ、以前みんながおれをからかったのもむりはないねえ。しかし彼は、ワインしか飲まないことを自慢して胸をたたいてみせた。いつもワインさ、ブランデー（eau-de-vie）なんて飲みやしない。ワインは寿命をのばす、健康にも悪くない、悪酔いもしない。（*Assommoir*, pp. 490［p. 174］）

ワインはクーポーやその周囲にとってはアルコールのうちにはいらない。それでもそれは度を過ごせば、看過できないのは明らかだ。「仕事場から仕事場へ、酒場から酒場へ渡り歩いて、一日をのらくら過ごした後では、ほろ

酔い機嫌で帰ってくることも何度かあった。」（pp. 490[p. 174]）こうした酒飲み一流の口実は、クーポーにとっては一時の誘惑に対する言い訳にすぎないのだが、それが度重なれば飲酒癖へといたる格好の契機となることは言うまでもない。

続いて五章で1855年6月になり、彼がしたたか酔った日のことが書かれている。この頃彼はやっと働き始めていたが、「6日のうち2日は途中で引っかかって仲間と飲んでしまい」（p. 503[p. 191]）、昼から帰宅するというありさまだった。この日も昼から帰ってきて、ジェルヴェーズがこの年の4月から始めた洗濯屋の作業場で、彼女と一緒にアイロンかけをして働く女たちをからかっていたが、意味ありげにブランデーは飲んではいけないということを突然言いだす。そして人から問われてもいないのに、「自分の首、女房の首、子供の首にかけて、ブランデーはただの一滴も体には入れちゃいないと誓う。」（*Assommoir*, p. 511[p. 202]）。それは彼がこの日あれほど自らに固く禁じていたブランデーに手を出して、その後ろめたさから思わずそう口走ってしまったのだと推測される。やがて深酒をするようになると、朝二日酔いにやられた日は仕事に出ない。しかし午後からは元気になるので酒場には繰り出す（p. 516[p. 208]）。それから話は「クーポー一家がグット=ドール通りで過ごす4回目の冬」（p. 543[p. 244]）を過ごして、春をまた迎えてからのことである。ジェルヴェーズは夫のクーポーが例のコロンブの＜居酒屋＞で、「＜長靴＞や＜網焼きビビ＞や＜辛口＞、別名＜飲み助＞たちと安物ブランデー（vitriol）のおごりあいをしているところ」を見かけた。

> クーポーはすっかり手慣れた様子で、粗悪ブランデー（schnick）を小さなコップで喉に流し込んでいるところだった。じゃあ、あの人、嘘をついていたんだわ。今じゃブランデーなんだ！彼女は絶望して、家へ帰った。ブランデーへの恐怖がふたたび彼女にとりついた。ワインなら許そう、働く者の滋養になるんだから。逆にアルコールは不潔な飲み物だ、働く者からパンの味を奪ってしまう毒だ。ああ、政府がこんないやらしい飲みものの製造を禁止してくれればいいのに！（p. 555[p. 260]）

このジェルヴェーズの述懐は先ほどのクーポーの自らに対する言い訳と一対をなしている。そこで顕著なのはワインとブランデーのあいだに良薬と毒物のあいだの明瞭な一線を引いていることだ。彼らのこうした主張の根拠にはそれらに含まれたアルコール度数の差異があることはもちろんだが、彼らがそのブランデーを常用するようになるとその先にはアルコール中毒という不吉な運命が待っていることをはっきり意識しているからでもある。こうしたいわば社会意識は現実にブランデーの引き起こす災禍が彼らの身のまわりで生起していることに由来する。

それにしても『居酒屋』の登場人物たちは、テーマがテーマだとは言え、ワインに限らず、リキュール、ブランデーとさまざまな種類のアルコールを男女の区別なしに機会あるごとによく飲んでいる。アルコールの整理をしながら、登場人物たちにブランデーの恐ろしさを意識させるようになった当時の事情を検討しておこう。

［以下の「後編」部分は『熊本大学社会文化研究』第 6 号（熊本大学大学院社会文化科学研究科、2008年）に掲載されている］

（注）

1．Émile Zola, La *Fortune des Rougon, in Les Rougon-Macquart*, vol. I, coll. Pléiade, Gallimard, 1960, p. 43［邦訳『ルーゴン家の誕生』伊藤桂子訳、論創社、2003年、p.51］. 以下、本書からの引用については、本文中に題名を *Fortune* と略記し、それにページ数を付けるだけにとどめた。また訳文は不都合のない限り上記邦訳をほとんど利用した。［　］内はその邦訳の該当ページを示す。

2．Émile Zola, *Les Rougon-Macquart*, vol. V, p. 1711［Ms. 10345, f° 89］.　以下ゾラの草稿については、［　］内にフランス国立図書館草稿部門所蔵の草稿分類番号を付記した。

3．*Ibid*., pp. 1777-1779［Ms. 10345, f°s 130］.

4．《Hérédité du penchant à l'ivrognerie》, *Ibid*., p. 1702［Ms. 10345, f° 74］.

5．*Ibid*., pp. 1719, 1728 et 1733［Ms. 10345, f° 102, 115 et 21］.

6．*Ibid*., p. 1711［Ms. 10345, f° 87］.

7．『日本大百科全書』小学館、『世界大百科事典』平凡社、『最新医学大事典』医歯薬出版株式会社、1996年。

8．Émile Zola, *Les Rougon-Macquart*, vol. II, p. 1540［Ms. 10303, f° 60］.

9．Émile Zola, *Émile Zola. L'Assommoir* du Colette Becker, PUF, p.34［Ms. 10271, f° 158］. ゾラは『居酒屋』に付した1877年1月1日付の「序文」でも同様の趣旨のことを語っている。「私

は、パリの場末の汚濁した環境の中での、ある労働者一家の宿命的な失墜を描こうとしたのである。飲酒癖と怠惰の末に生まれる家族関係の解体、猥雑な雑居状態、誠実な感情の加速度的な忘却、そして、あげくの果ての汚辱と死。これこそ、生きた教訓で、それ以外のものではない。」（Émile Zola, *L'Assommoir, in Les Rougon-Macquart*, vol. II, p. 373［邦訳『居酒屋』古賀昭一訳、新潮文庫、1970年、p. 5］）

10. Émile Zola, *L'Assommoir, in Les Rougon-Macquart*, vol. II, p. 376［邦訳『居酒屋』古賀昭一訳、新潮文庫、1970年、p. 8］.以下、本書からの引用については、本文中に題名を*Assommoir*と略記し、それにページ数を付けるだけにとどめた。また訳文は不都合のない限り上記邦訳を利用した。［　］内はその邦訳の該当ページを示す。
11. Jeanne Gaillard, 《Réalités ouvrière et réalisme dans l'*Assommoir*》, *Cahiers naturalistes*, nº 52, 1978, p. 33.
12. 喜安朗『パリの聖月曜日』平凡社、1982年、pp. 9-30.
13. R. Romme, *L'alcoolisme et la lutte contre l'alcool en France*, Masson & Gauthier-Villars, sans date［1912］, p. 80.
14. Jeanne Gaillard, Art. cit., p. 36.
15. 喜安朗、前掲書、pp. 214-215.
16. Émile Zola, *Les Rougon-Macquart*, vol. II, pp. 1550-1553［Ms. 10271, f°s 2 & 3］et la note concernant la p. de 749, p. 1597.『居酒屋』のテクストにはジェルヴェーズ一家の出来事に関わる具体的な年代の記述はいっさいない。したがって本文中の年代はすべて推定年代であり、ミットランのプレイアッド版注記における推定とほぼ一致する。下記にテキストなどからこの年代推定の根拠を抜き出し、表にして整理したものを示す。

章	『居酒屋』の記述	出版前のプラン	系統樹	ミットランの推定	史　実
『繁栄』	ジェルヴェーズ1828年生れ		ジェルヴェーズ1828年生れ		
1	クロード８歳、エチエンヌ４歳(376)、５月(377)、ランチエ26歳(380)、ジェルヴェーズ22歳(381)	１章1850年５月	クロード1842年生れ、エチエンヌ1846年生れ		
2	クーポー26歳(404)、［クーポーばあさんは先月３日62歳］(413)、６月末(418)、６月(420)、６月(423)、［７月29日の結婚式予定］(429)	２章			
3	クーポーとジェルヴェーズの結婚式（７月29日）	３章1850年７月29日	1852［1851--éd de 1869］年ジェルヴェーズとクーポー結婚		５月31日の法律(455)
4	過酷な労働の４年(463)、４月の末に新居へ引っ越し(465)、ナナ４月30日誕生(467)、３年間無事過ぎた(475)、エチエンヌ８歳(476)、ナナ３歳(477)、５月［クーポーが転落事故］(479)、［グージェが９月上旬結婚式予定］、クーポーは事故から２カ月(487)、さらに２カ月(488)、６カ月経過(490)	４章1851～54年 ５章1854年	ナナ1852［1851--éd de 1869］年生れ		12月２日の暴動、２月と６月の見せしめ(475)

5	4月［ジェルヴェーズ店を借りる］(492)、ジェルヴェーズ28歳(501)、6月のある午後（503)、ラリー2歳(509)、7月の夜(517)、エチエンヌ12歳、夏の終わり、ナナ6歳(518)、10月末(521)、クーポーばあさん67歳(522)、3年過ぎた(524)	6章1855年 7章1858年		1855～1858年	
6	秋のある午後(526)、グット・ドール街の4度目の冬、12月、1月(543)、春(553)、ラリー4歳(557)	8章1858年		1858年	
7	ジェルヴェーズの誕生日6月19日(558)、6月の宵（570)	9章1858年			
8	ランチエ35歳(597)、11月初旬(599)、春(601)、6月初め(604)、1年過ぎた(610)、夏のさなか(611)、11月初め頃(620)	10章1859年 11章1859～60年		1858年冬～1860年12月	
9	12月、クーポーばあさん聖アントワーヌの祝日［1月17日］に73歳(633)、さらに1年間、夏(644)、秋、12月(649)、1月1日以前(650)、12月一杯、1月（652)、クーポーばあさん死去(653)	12章1860年 13章1861年		1860年12月～1862年初め	
10	13年も時間が逆戻り、冬、3カ月(677)、6月、ナナまもなく13歳(678)、それから2年、12月、最初の冬、次の冬、1月の家賃(683)、1月のある晩(688)、ラリー8歳(689)、3月クーポー、アル中で入院(695)	14章1862年 15章1863年		1863～1865年	
11	ナナ15歳(708)、夏(709)、7月(715)、冬(726)、11月のある夜(738)、3年間に7回入院(745)、［先の夏］(745)、初霜、冬(746)、6月、7月(747)、	16章 1864～66年 17～19章 1867～68年		1866～1868年	ポワソニエール市門が壊され、マジャンタ通りとオルナノ通りが開通(737)
12	1月12日か13日(749)、冬（753)、1月の酷寒(761)、［長靴が夏の終わりに結婚］(762)、たった20年(766)、［グージェの母親が10月死去］(775)	18～20章 1867～68年		1869年1月	屠畜場の取り壊し(768)
13	翌日(780)、1週間(781)、クーポーがサン・タンヌ病院で狂死(794)、数ヵ月経過(795)、ジェルヴェーズ餓死(796)	21章1868年	1869年ジェルヴェーズ、アル中で死去		

（　）はプレイアッド版『居酒屋』のページ、［　］は想起、予定、ないし筆者の補足。なお表中でクーポーばあさんやラリーに関する記述に関しては、ゾラ自身が思い違いをしたのであろうか、計算が合わない。

17. Jacques Hillairet, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, 2 vols, Minuit, 1985［9e édition］. 以下本書への参照については、題名を『街路辞典』と略記する。
18. Louis Chevalier, *Montmartre du plaisire et du crime*, 1980, Robert Laffont, la note de la p. 94［p. 131］［『歓楽と犯罪のモンマルトル』河盛好蔵他訳、文芸春秋、1986年］. 以下本書を参照する際、題名を『モンマルトル』と略記し、参照ページについては上記邦訳の該当ページも［　］内に付した。
19. Henri Mitterand, la note pour la p. 709 d'*Assommoir, op. cit*., p. 1594.
20. Valentin Magnan, *De l'alcoolisme. Des divers formes du délire alcoolique et de leur traitement,* Delahaye, 1874.
21. Naomi Schor, 《Saint-Anne, Capitale du délire》, *Les cahiers Naturalistes*, nº 52, 1978, pp. 97-108.
22. Valentin Magnan, *Op. cit*., pp. 3 et 256. ちなみにアルコール中毒が病毒物質（agent toxique）によって神経系を冒されたために発症するというアルコール中毒に関する病理学は、19世紀半ば以来の疾病分類学を踏襲している（Cf. Alain Contrepois, *L'Invention des maladies infectieuses*, Éditions des archives contemporaines, 2001, p. 40.）。
23. R. Romme, *Op. cit*., p. 100.